



セ ン タ ー 長 報 告

半年の活動を振り返って

2019年春学期、CISMORは2回の大規模な国際会議を含めた一連の活動を行いました。各々の国際会議ではいずれも2日間に亘って講演とワークショップが催され、海外から招聘された研究者達が参加しました。いずれの会議でも、本学神学館礼拝堂において一般参加者向けに日本語にて講演を行い、多くの参加者を得ました。すべてではありませんが、両公開講演会については、CISMOR YouTubeを通じてオンラインで視聴できるようになっています。最初の国際会議は4月13～14日に催され、インドヨーロッパ語とヒッタイトロジーの学者であるリュブリャナ大学(スロベニア)のMarina Zorman教授も参加され、基調講演を行いました。会議のテーマは、主に今日のイラク、シリア、トルコの地域を中心とした古代世界の国際的な文化的接触でした。

5月に開催された、ベングリオン大学ヘクシェリム研究所との合同主催による2番目の国際会議では、イスラエル、イギリス、アメリカより12人の研究者をお招きし、現代日本および現代ヘブライ文学におけるキリスト教に対する態度の文化的側面に焦点を当てました。

同月、世界の移住における旧約聖書の研究に関するトピックについて、若手研究者向けのワークショップも英語で催しました。これらのいくつかは、今後、学術誌『一神教世界』(The World of Monotheistic Religions)第11巻(2020年

3月公刊予定)に掲載される予定です。

また、Visiting Scholarsによる3つのセミナー(生存者の第二世代におけるホロコーストの影響についての研究に関するもの、20世紀になされた人権宣言の70年後における人権についてのもの、都市の歴史的発展における宗教の影響に関する学術的研究についてのもの)を、いずれも英語で催しました。

7月には、エジプトにおけるヨセフの旧約聖書物語についての表現を扱ったシンポジウムを開催し、後代のユダヤにおける資料、イスラームのテキスト、日本のキリスト教教育、および英国のミュージカルにおいて描かれたヨセフを確認しました。当シンポジウムは一般に公開され、キリスト教の福音に関連する音楽の演奏で締めくくられました。

これらすべての活動の詳細については、本号の要約と写真をご覧ください。

最後に、CISMOR幹事会の長年のメンバーである、Samir Abdel Hamid Nouh教授の本年4月30日の急逝を悼みます。彼は、会議やその他イベントの企画や準備、当センターのアラビア語出版物の創刊・編集等を通じて当センターの活動に大きく貢献されました。教授のご家族や友人に対し、心より哀悼の意を表します。

(一神教学際研究センター長 Ada Taggar Cohen)



国際会議  
公開講演会  
シンポジウム  
研究会  
報告

国際会議

## 古代近東の国際社会における多様な文化 (International Cultural Diversity in the Ancient Near East)

主催：同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)  
共催：科学研究費補助金 若手研究 (B) 「紀元前 2 千年紀ヒッタイト王国によるアナトリア支配の実態と王国の境界」(研究代表者 山本 孟、同志社大学、領域番号：7K13549、研究期間 2017-2019)  
協賛：三島海雲記念財団

### 公開講演会

【日時】 2019 年 4 月 13 日 (土) 13:00-15:45  
【会場】 同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル  
【講師】 下釜 和也 (古代オリエント博物館研究員)  
藤井 信之 (関西大学東西学術研究所非常勤研究員)

### 研究発表会

【日時】 2019 年 4 月 13 日 (土) 16:15-17:45、14 日 (日) 10:40-16:50  
【会場】 同志社大学今出川キャンパス 至誠館 3 階会議室  
【発表者】 マリーナ・ゾルマンほか 6 名 (詳細は本文参照)



下釜和也氏



藤井信之氏



マリーナ・ゾルマン氏

2019 年 4 月 13 日～14 日、同志社大学一神教学際研究センターは、国際会議「古代近東の国際社会における多様な文化」を開催した。

古代の中近東世界は今日と同じようにグローバルな世界だった。その数千年に及ぶ歴史の中で、東はメソポタミアから西はアナトリアまで、南はレバント・エジプトの間で活発な経済交流と文化の伝播があった。当時の文字資料と考古遺物からは、東地中海世界からメソポタミアに広がる「国際社会」があったことがわかっていく。この「国際社会」においていかにヒトとモノが移動し、知識や文化が伝わったのかを理解するために、本会議では古代中近東における国際交流について、文献学と考古学両方の視点から研究報告を行い議論した。また、研究会に先立ち、公開講演会を開催し、西アジア考古学とエジプト学を専門とする先生を招き、レバント・メソポタミア・エジプトの間の文化的相関関係に焦点を当てたテーマで講演いただいた。プログラムは以下の通りである。

### 2019 年 4 月 13 日 (土) 公開講演会

13:00-13:10  
開会挨拶 アダ・タガー・コヘン (CISMOR センター長)  
13:10-14:30  
下釜和也 (古代オリエント博物館研究員)  
「古代メソポタミアの地域間交流—シリア青銅器時代～鉄器時代の考古学研究を中心に—」  
14:45-15:45  
藤井信之 (関西大学東西学術研究所非常勤研究員)  
「サイス朝エジプトと旧約聖書：エジプト学の視点から」

最初の講演では、下釜氏が中近東各地で発見された考古遺物から、先史時代から鉄器時代にいたる同地域の文化的交流について概観し、シリア北部にあるテル・

アリー・アル＝ハッジ (テル・ルメイラ) 遺跡の出土遺物や遺構の分析から、古代メソポタミア文明における地域文化の独自性と国際性を示された。

次の講演では、藤井氏がヘブライ語聖書に記される、新バビロニアがエジプトを滅ぼすという預言について、史実とその記述の背景を示された。新たな碑文の調査資料を用い、実際には新バビロニアによってエジプトが滅ぼされることはなかった点が明らかにされると共に、そのような記述が生まれた原因についても示された。

公開講演後は、同テーマの下で研究会を開催した。4 月 13 日には研究会の基調講演としてスロベニアのリュブリャナ大学教授マリーナ・ゾルマン氏から講演をいただき、4 日 14 日にはアッシリア・古代アナトリア・聖書世界にかんする研究報告が行われた。具体的なプログラムは以下の通りである。

### 2019 年 4 月 13 日 (土)

16:15-17:45  
マリーナ・ゾルマン (リュブリャナ大学)  
“Religious tolerance and its limits in the Hittite Kingdom”

### 2019 年 4 月 14 日 (日)

10:40-11:20  
渡辺和子 (東洋英和女学院大学)  
“Deified Documents Crossing over the Borders: Disseminations of the Tablets of Esarhaddon’s Succession Oath Documents and their Aftermath”  
13:00-13:40  
アダ・タガー・コヘン (同志社大学)  
“Hittite Religious Cultural Heritage and the Hebrew Bible Description of Ancient Israelite Religion”  
13:40-14:20  
増淵麻里耶 (京都造形芸術大学)  
“Iron/Steel Traditions of the Hittites”





渡辺和子氏



アダ・タガー・コヘン氏



増渕麻里耶氏



山本孟氏



青島忠一朗氏

and the Subsequent Cultures at a Central Anatolian Site, Kaman-Kalehöyük”

14:50-15:30

山本孟 (同志社大学)

“The Hittite Concept of Defilement and Expansion of Territories”

15:30-16:10

青島忠一朗 (中央大学)

“Assyrian Royal Representation and Foreign Cultures”

16:10-16:50

北村徹 (同志社大学)

“Tradition and transformation in the Book of Ezekiel: Exile and Priestly Tradition” [日本語]

初日の基調講演において、ゾルマン氏は、古代アナトリアのヒッタイト人たちが他の宗教に対して寛容であったと、多くのヒッタイト学者が想定していることに疑問を呈した。これはヒッタイトがアナトリアの他の民族の神々を、国のパンテオンに受容したことを根拠とする見方だが、ゾルマン氏は文書資料の精緻な読解を通じて、ヒッタイトがアナトリアの支配を、都ハットゥシャに座する王国の主神「ハッティの嵐の神」の一部と見なそうとしていた点を示した。

二日目の研究会午前の部では、渡辺氏が、新アッシリアの王が属王に忠誠の誓いを立てさせる方法から、彼らが「アッシュルの国」を神の国とし、誓いを立てたすべての国々がアッシュル神に帰属するものと捉えていたことを示した。とりわけ属王がアッシュルの名の下での誓いを受け入れたことは、すなわちアッシュル神の優越性を認めていたことに他ならない点を指摘した。

同日午後の部の前半、コヘン氏は、考古学と文献学の視点から、聖書テキストに見られるヒッタイトの文化的遺産とその文化圏の関係性・接触について、新しい見方を提示した。近年見つけた二つの考古遺物を挙げ、そこに聖書世界とアナトリアの接触が示唆されることを指摘すると共に、ヒッタイトとヘブライ語聖書における祭祀の研究を踏まえ、聖書の herem(=禁忌)の考え方の解釈を提示した。

次の増渕氏は、青銅器時代から鉄器時

代アナトリアで鉄がいかに製造・使用されたかについて詳細な理解を示した。これはカマン・カレホック遺跡における鉄の遺物を用いた同氏の研究成果であり、鉄がどのように、そして何のために使用されていたのかという点を明らかにした。

午後の部の後半、山本は、ヒッタイトの戦争と領土拡大と王権観について概観した。戦時に国土にもたらされる悪の排除と領土拡大を、ヒッタイト王に期待される特質として挙げ、そのイデオロギーを新アッシリアとヘブライ語聖書世界と比較した。

次の青島氏は、新アッシリアが、シリア北部とレバントの王宮と神殿様式を採用しようとしていたとして、建築・美術様式が古代世界の端から端へと伝播したことを示した。それが輸入された結果なのか、あるいはアッシリアに連れてこられた職人によるものかの判断は難しいという点も明らかになった。

北村氏は、古代中近東世界全体を支配した新バビロニアの時代に生きた、ヘブライ語聖書における預言者エゼキエルについての見方を示した。バビロンに生きたエゼキエルが、イスラエルとその神殿が新しくもたらされるという預言により、エルサレムからの捕囚民に、いかに希望を与え得たかについて指摘した。

公開講演会と二日間に行われた研究会における研究報告では、考古学と文献学の視点から、古代中近東世界における文化の多様性を示す、非常に興味深い事例が提示された。報告を通じて、シリア北部・アナトリア・レバント・エジプト・新アッシリア・新バビロニア・聖書のイスラエルにおいて、多様な文化が物質的・精神的に共有されていたことが明らかとなった。また、各研究報告の後には活発な議論が行われ、新たな見方が専門の異なる参加者の間で共有されたことで非常に意義深い会となった。

公開講演会には、約 130 人もの一般聴衆があり、非常に盛会であった。講演の前半の様については、CISMOR ホームページ上に YouTube 動画としても掲載されており (<https://youtu.be/Wv-QI5hfW9E>)、専門家による研究成果を広くアウトリーチできると思われる。

(CISMOR リサーチフェロー 山本孟)

CISMOR ワークショップ

## The First CISMOR Young Scholars' Research Group Workshop

(CISMOR 一神教学際研究会 2019 -1 (若手研究者による研究会))

### In Collaboration with The Graduate School of Theology and The Graduate School of Global Studies

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)  
同志社大学神学部・神学研究科  
同志社大学グローバル・スタディーズ研究科

【日 時】 2019年5月11日(土) 10:30-16:30

【会 場】 同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階会議室

【発表者】 Kyoko Shiga ほか9名 (詳細は本文参照)

2019年5月11日、本年度第1回目の「CISMOR 一神教学際研究会 (若手研究者による研究会)」が開催された。この会の主旨は、大学院生などの若手研究者に研究発表の機会を提供し、また、その発表に対して与えられるフィードバックなどを通して、若手研究者の育成を図ることである。

今回の研究会では、本学神学研究科博士課程在籍中の大学院生や本学グローバル・スタディーズ研究科博士課程在籍中の大学院生による発表のみならず、2019年3月17日から24日の日程で行われた、外務省主催「カケハシ・プロジェクト (KAKEHASHI Project)」(ユダヤ研究者派遣)に参加したCISMORリサーチフェローによる報告も行われた(「カケハシ・プロジェクト」(ユダヤ研究者派遣)については、前号(vol. 28)、19頁を参照)。

具体的なプログラムは次の通りである。

#### SESSION A

Chair: Hisae Nakanishi (Graduate School of Global Studies)

10:30-11:00

①Kyoko Shiga (PhD student of the Graduate School of Global Studies)  
"The Feature of Turkish Migrants in the U.S.: Discussion with Studies on Turkish Migrants in Europe"

11:00-11:30

②Ako Muto(PhD student of the Graduate School of Global Studies)  
"How Humanitarian Assistance and Development Assistance under a Conflict Relates to the Sovereignty of the State? - Formulating the

Framework for Analyzing the Syrian Conflict"

#### SESSION B

Chair: Ada Taggar Cohen (Graduate School of Theology)

13:00-13:30

③Miyaki Arai (PhD student of the Graduate School of Theology)

"The variety of the meanings of the words for 'dead' in Psalm 88"

13:30-14:00

④Etsuko Tsutsumi (PhD student of the Graduate School of Theology)

"The Symmetry of The Book of Jonah"

14:00-14:30

⑤Keyaki Asano (MA student of the Graduate School of Theology)

"The 'Wise Woman' (אִשָּׁה חַכְמָה) in the Hebrew Bible"

14:30-15:00

⑥Takuya Kobayashi (PhD student of the Graduate School of Theology)

"Differently Abled in the Hebrew Bible"

#### SESSION C

Report on the Study Tour with KAKEHASHI project in the USA

The research theme was Jewish Studies and Research in the USA

The Study Tour was held 3/17-3/24/2019

15:30-16:30

⑦Dr. Tetsu Kitamura (Lecturer at the School of Theology, CISMOR Research Fellow)

Dr. Taiji Abe (CISMOR Research Fellow)



Kyoko Shiga 氏



Ako Muto 氏



Miyaki Arai 氏



Etsuko Tsutsumi 氏



Keyaki Asano 氏





研究会参加者



研究会の様子 (SESSION B)



Takuya Kobayashi 氏



研究会の様子 (SESSION A)



研究会の様子 (SESSION C)



Tetsu Kitamura 氏



Taiji Abe 氏



Kotaro Hiraoka 氏



Anri Ishiguro 氏

Dr. Kotaro Hiraoka (Lecturer at the School of Theology, CISMOR Research Fellow)

Dr. Anri Ishiguro (Assistant Professor at the School of Theology, CISMOR Research Fellow)

以下、今回の発表内容を発表順に簡単に記す。

- ①米国トルコ系移民には、経済的な成功、社会的地位の改善、子供たちへの高等教育の提供、といった、ヨーロッパの状況とは異なる「アメリカン・ドリーム」を期待して移住してきたという特徴がある。
- ②紛争中のシリアへの民主的な社会の構築を期待する支援の目的とメカニズムは他のケースと異なっており、国家の主権を尊重した支援が、国内全体に行き渡らないことがあることから、シリア国家への支援は必ずしも同国の民主化に寄与するとは限らない。
- ③詩編 88 編の「死」に対応するヘブライ語（複数）には、様々な意味がある。
- ④『ヨナ書』各章の対称的な構成を精査すると、恐しさや後悔といった、神の異なる特徴がわかる。さらに同書は神がヨナの主であることを示しており、ヨナにのみ示された主との長い対話や賛美の様な祈りから、ヨナが偽預言者ではないことが示されている。

⑤ヘブライ語聖書における「知恵のある女 (אשה חכמה)」とは、単に知識を持った賢い女性という意味ではなく、「乳母」や「遊女」、「女預言者」などと並ぶ、男性と同等の公的役割を担っていた女性の職名を表すものと捉えられる。しかし、ダビデ政権以降、宗教的・神学的な変化や統治形態の変化等の中で消失したのかも知れない。

⑥ヘブライ語聖書の著者達は、障がいを持った人々、神との対話に困難を覚える人々、および人間の存在自体に関して深く疑問を抱く人々の複雑な感情を表現しようとしたのではないかと。ハンディキャップのない人々が健常者の視点から障がい者を評価することは簡単だが、困難な状況を通してのみ表現される苦痛・苦悩・悲嘆にも多くの注意を払うべきである。

⑦「カケハシ・プロジェクト」(ユダヤ研究者派遣)報告(構成:導入(Kitamura 氏)、Kosher 認証(Abe)、パネル展示及び報告(Hiraoka 氏、Ishiguro 氏))。

上記の様に、今回も様々なテーマが扱われ、多種多様な発表内容であった。今後も若手研究者の積極的な参加が期待される。

(CISMOR 特別研究員 阿部泰士)

国際会議

## The 10th CISMOR Conference on Jewish Studies

(第10回ユダヤ学会議)

### “The Place of Christianity in Modern Hebrew and Japanese Literature:

### Its Roots and its Contemporary Expressions”

(「現代ヘブライ文学および日本の近代文学におけるキリスト教の位置—その根源と現代的表現—」)

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)  
同志社大学神学部・神学研究科  
ネゲブ・ベングリオン大学ヘクシェリム研究所

基調講演

【日時】 2019年5月18日(土) 13:00-15:00

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル

【講師】 中村信博(同志社女子大学学芸学部教授)

研究発表会

【日時】 2019年5月18日(土) 9:30-11:30 / 15:30-18:00、19日(日) 9:30-17:45

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階会議室

【発表者】 Doron B. Cohen ほか 13名(詳細は本文参照)

2019年5月18日(土)19日(日)、同志社大学今出川キャンパス至誠館3階会議室において、CISMOR、本学神学部・神学研究科、ネゲブ・ベングリオン大学、ヘクシェリム研究所の共同開催による国際会議、「第10回ユダヤ学会議(The 10th CISMOR Conference on Jewish Studies: CJS10)」が開催された。本会議は2005年に始まったもので、これまで、古代から現代までのユダヤに関する歴史や文化、キリスト教やイスラームなどの他の一神教との関連性、あるいは日本文化との関係などが議論されてきた(<http://www.cismor.jp/jp/series/judaic/>)。

前回の第9回(2017年)に引き続いて開催された今回の会議のテーマは、「現代ヘブライ文学および日本の近代文学におけるキリスト教の位置—その根源と現代的表現—(“The Place of Christianity in Modern Hebrew and Japanese Literature: Its Roots and its Contemporary Expressions”）」というもので、海外からの研究者15名を含む42名の研究者や大学院生が参加し、活発な議論が繰り広げられた。また本会議の基調講演として、中村信博氏(同志社女子大学学芸学部)による「近代日本文化の基層とキリスト教との接点としての文学(“Literature as the Interface between the Foundation of Modern Japanese Culture and Christianity”）」と題した講演が、18日に神学館チャペルで一般公開された。

公開講演会を含む会議全体のスケジュールは、以下のようなものであった。  
Saturday May 18, 2019

9:30-11:30

Session A: Introduction

Greetings and Opening Words

Ada Taggar Cohen (Director of CISMOR, Doshisha University)

Yigal Schwartz (Head of Heksherim Institute, Ben Gurion University of the Negev)

Opening Papers

Doron B. Cohen (School of Theology, Doshisha University)

“Christianity in Japan and its Impact on Literature”

Avner Holtzman (Department of Literature, Tel Aviv University)

“Hebrew Poetry Looks at Christian Art”

13:00-15:00

Session B: Public Lecture

Nobuhiro Nakamura (Faculty of Liberal Arts, Doshisha Women’s College of Liberal Arts)

「近代日本文化の基層とキリスト教との接点としての文学」

“Literature as the Interface between the Foundation of Modern Japanese Culture and Christianity”

15:30-17:30

Session C: Reflections on Modern Japanese Literature

Massimiliano Tomasi (Center for East Asian Studies, Western Washington University)

“The Influence of Christianity on Meiji and Taishō Literature”

Mark Williams (International Christian University)

“The Formality of the *fumie*? A Reconsideration of the Role of the *fumie* Scene in Endo Shusaku’s *Silence*”

Hisao Takagi (Center for Liberal Arts, Meiji Gakuin University)

“Pauline Tenet Echoing in an unlikely Place: Judaism and Christianity in High School Textbooks in Japan”

18:00

Buffet Dinner



中村信博氏



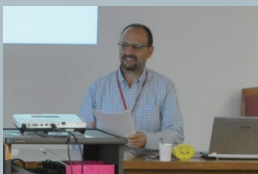
Ada Taggar Cohen 氏



Doron B. Cohen 氏



Avner Holtzman 氏



Massimiliano Tomasi 氏



Mark Williams 氏



Hisao Takagi 氏





18日の研究会の様子



基調講演の様子



18日の研究会参加者



19日の研究会の様子

Sunday May 19, 2019

9:30-11:30

Session D: Ancient Hebrew Literature  
Haviva Ishay (Department of Hebrew Literature, Ben-Gurion University of the Negev)

“My friends, it is I – I am the poet who lies”: Medieval Hebrew Poetry in Christian Spain”

Haim Weiss (Department of Hebrew Literature, Ben-Gurion University of the Negev)

“The Martyrium of Ben-Tradyun: From Talmudic and Christian Sources to the Book of Legend”

Etsuko Katsumata (School of theology, Doshisha University)

“Christianity in the Sight of Wissenschaft des Judentums”

13:00-15:00

Session E: Modern Hebrew Poetry  
Anat Weisman (Department of Hebrew Literature, Ben-Gurion University of the Negev)

“Judaism, Christianity, Hebraism: The Pagan Poetics of Saul Tschernichovsk (1875-1943) and the Critique of Monotheism”

Roy Greenwald (Department of Hebrew Literature, Ben-Gurion University of the Negev)

“The Word becoming Flesh: Incarnation as poetic principle in Modernist Hebrew and Yiddish Poetry”

Hanna Soker-Schwager (Department of Hebrew Literature, Ben-Gurion University of the Negev)

“*In the Beginning there was the Word*”: The Opening of John’s Gospel: Its Hebrew Translation and its Role in Hebrew Literature”

15:30-17:30

Session F: Modern Hebrew Literature  
Yaron Peleg (Faculty of Asian and Middle Eastern Studies, University of Cambridge, Jesus College)

“Hebrew Style? Christian Style? Religious Sensibility as Literary Form”  
Tamar Setter (Department of Hebrew Literature, Ben-Gurion University of the Negev)

“Israeli Literature’s Correspondence with the Character of Jesus Christ: The Case of David Schütz”

Neta Stahl (Department of German and Romance Languages and Literatures, Johns Hopkins University)

““Tempted by the Cross”: Paintings of the Crucifixion in Israeli Literature”

17:30-17:45

Closing Remarks

以上のように、会議のテーマである、「現代へブライ文学および日本の近代文学におけるキリスト教の位置」に関して、国内外の研究者による研究発表および活発な質疑応答がなされ、充実した二日間になった。また、中村信博氏による公開講演会は、日本の近代化においてキリスト教が果たしてきた役割、特に近代社会の基礎である個人概念の形成と影響に関して、太宰治や田山花袋などの作家の検討や、大学の教育現場での聖書の扱われ方などを中心に考察を行うもので、キリスト教そのものよりも文学が個人とその内に潜む罪意識の問いかけを行った点に、日本のキリスト教理解の特徴を指摘し得るのではないかと問題提起がなされた。こちらも非常に興味深い内容で、100名ほどの参加者が中村氏の講演に耳を傾けた。本会議における研究発表や基調講演は、後日、プロシーディングスとしてCISMORから出版される予定である。

(CISMOR 特別研究員 北村徹)



Haviva Ishay 氏



Haim Weiss 氏



Etsuko Katsumata 氏



Anat Weisman 氏



Roy Greenwald 氏



Hanna Soker-Schwager 氏



Yaron Peleg 氏



Tamar Setter 氏



Neta Stahl 氏

第 18 回 CISMOR セミナー

## Are Catastrophes Inherited?: The Case of the Second Generation of the Holocaust

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

【日時】 2019 年 6 月 3 日（月）16:40-18:10

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 至誠館 3 階会議室

【講師】 Yigal Schwartz

（ネゲブ・ベングリオン大学ヘブライ文学部教授／ヘクシェリム研究所長）



Yigal Schwartz 氏

2019 年 6 月 3 日（月）、同志社大学今出川キャンパス至誠館 3 階会議室において、Yigal Schwartz 氏（ネゲブ・ベングリオン大学ヘブライ文学部、ヘクシェリム研究所長）による第 18 回 CISMOR セミナー、“Are Catastrophes Inherited? The Case of the Second Generation of the Holocaust” が開催された。人類が経験した極限的暴力のひとつと呼び得るホロコーストを経験した者のその経験が、家族間の関係性、特に第 2 世代に対してどのような影響を及ぼしているかに関する、Schwartz 氏ご自身も含めた 3 人およ

びその家族などの証言を中心としたドキュメンタリー映画が上映された。その後行われたディスカッションでは、圧倒的暴力に曝された経験の世代間における継承に関連して、世代間における暴力がひとつのトピックとなった。このような内容はプライバシーもあり、第三者への開示は難しい面があったと思われるが、それにも関わらず貴重な情報や体験を共有する機会を与えて下さった Schwartz 氏に深い感謝を記したい。

（CISMOR 特別研究員 北村徹）

第 19 回 CISMOR セミナー

## Religious Voices and the Making of Modern Human Rights: 70 Years After the UDHR

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

共催：同志社大学グローバル・スタディーズ研究科

【日時】 2019 年 6 月 4 日（火）10:45-12:15

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 至誠館 3 階会議室

【講師】 Peter Petkoff

（ブルネル大学ロースクール講師）



Peter Petkoff 氏

6 月 4 日（火）、同志社大学今出川キャンパス至誠館 3 階会議室において、本年度 2 回目となる CISMOR セミナー（第 19 回）、“Religious Voices and the Making of Modern Human Rights 70 Years after the UDHR” が開催された。

セミナーでは、Peter Petkoff 氏により、「UDHR（Universal Declaration of Human Rights（世界人権宣言）が我々にもたらしたこと」「人権の歴史」「近代的人権の誕生」「宗教を変える権限についての Christian-Muslim の関与」「4 つのタスク（①個人は集団よりも尊重される、

②人間の良心は最も神聖不可侵である、③人間の必然的な承認を含んだ国家・宗教・人種への社会的抑圧は、いずれも表明可能である、④個人が属する社会的集団の是非は裁判官にのみ委ねられる）」「キリスト教会の権威下での人権的課題」「人権が我々にもたらしてきたこと」といった内容のご講話がなされた。

当日は多方面の研究者・専門家の方々が参加され、充実した時間となった。此度ご講演を賜った Peter Petkoff 氏に心より感謝を申し上げる次第である。

（CISMOR 特別研究員 阿部泰士）



シンポジウム

## ヨセフの物語について —宗教、芸術、音楽の観点から (The Story of Joseph: In Religion, Art and Music)

主催： 同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)

【日時】 2019年7月6日(土) 13:00-15:00

【会場】 同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル

講演

【講師】 勝又悦子(同志社大学神学部准教授/一神教学際研究センター幹事)

森山 央朗(同志社大学神学部教授)

Christian Morimoto Hermansen(関西学院大学法学部教授)

David Chandler(同志社大学文学部教授)

演奏

【演奏者】「関谷先生とその仲間たち」

【解説】 関谷 直人(同志社大学神学部教授)

2019年7月6日(土)、同志社大学今出川キャンパス神学館チャペルにて、公開シンポジウム、「ヨセフの物語について—宗教、芸術、音楽の観点から」(“The Story of Joseph: In Religion, Art and Music”)が開催された。シンポジウムのテーマは、ヘブライ語聖書(旧約聖書)の主要な登場人物の一人であるヨセフについてのものであり、様々な文化や宗教において、幾世代にも渡って用いられてきたヨセフの物語について、学際的な視点を提供することがその趣旨だった。

ヨセフに関して簡単に説明すると、ヘブライ語聖書(旧約聖書)の枠組みの中で、彼は創世記から出エジプト記へと物語をつなぐ、橋渡的存在である。アブラハム・イサク・ヤコブというイスラエルの父祖の物語が展開する中で、彼はヤコブの息子として生まれる。ヨセフは、両親や兄達が自らにひれ伏すことを象徴するような夢を見るなど、特に兄達からすると非常に生意気な存在であり、彼らからの強い反感の結果、エジプトで囚人の身分に陥る。しかし、ヨセフはファラオの夢の意味を解くことによって、その後発生する厳しい飢饉への備えに携わり、エジプトでファラオに次ぐ立場となる。一方、カナンの地で飢饉に苦しむ父ヤコブは、食料を得るために息子達をエジプトに遣わし、エジプトに到着したヨセフの兄達は、それと知らず、自分達が追いやったヨセフから食料を得る。彼らは相手が弟ヨセフであることを知って和解し、また、ヨセフは父ヤコブをエジプトに呼び寄せ、エジプトにおけるイスラエルの人々の繁栄が導かれていき、「出エジプト」の物語へと展開していく。このように、ヨセフの物語は非常にドラマチックで、現代の我々においても興味深い内容である。本シンポジウムでは、各宗教や文化におけるヨセフについて紹介された。プログラムは講演の部と演奏の部に分かれ、

講演に関しては、勝又悦子氏(同志社大学神学部准教授/ユダヤ学、ラビ・ユダヤ教の聖書解釈)、森山央朗氏(同教授/歴史学、前近代西アジア・ムスリム社会におけるイスラーム宗教知識人ウラマーを研究)、Christian Morimoto Hermansen氏(関西学院大学法学部宣教師並びに教授/デンマーク人による日本におけるキリスト教宣教活動、日本の宗教と日本人の信仰観など)、David Chandler氏(同志社大学文学部教授/英文学、オペラやミュージカルなどの音楽劇)の各氏から、各々のご専門に基づく発題がなされた(カッコ内は各氏のご所属とご専門)。また、演奏に関しては、「関谷直人先生(同大学神学部教授/実践神学とキリスト教文化学)とその仲間たち」によって、「勝利者」(作詞作曲:小坂忠)と“Amazing Grace”の二曲が上演された。以下、各講演について、簡単に触れる。

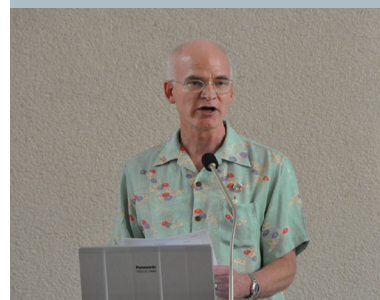
勝又悦子氏は、「ユダヤ教聖書解釈におけるヨセフ—創世記49章へのタルグム(アラム語訳聖書)を通して」の題目で、ユダヤ学の観点からヨセフについて話された。勝又氏は古代のシナゴークやユダヤ美術、また、ラビ・ユダヤ教においてヨセフは例えばアブラハムなどと比較してそれほど表立って現れないのに対して、タルグム文学ではヨセフが様々な解釈(敷衍)されている印象を持っていると述べられた。勝又氏はミドラシュ(ユダヤ教における主流派の聖書解釈)とタルグム(少数派)とではヨセフの受け止め方が異なり、ラビ・ユダヤ教社会はヨセフにあまり関心がなかったのに対し、タルグムは独自の解釈的な世界を展開したのではないかとの問題提起をされた。また、タルグムは特にヨセフに関する部分で、音や韻、色彩、香りなど五感に訴えかけてくる記述を持ち、独特の豊かな世界を持っていることを指摘された。



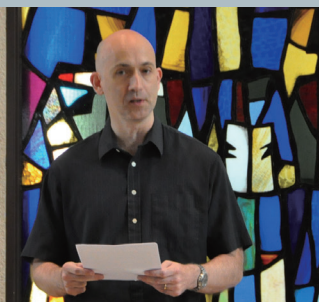
勝又悦子氏



森山央朗氏



Christian Morimoto Hermansen 氏



David Chandler 氏



森山央朗氏は、「ユースフ（ヨセフ）章」（『クルアーン』第12章）をめぐる解釈と伝承：タバリー（923年没）の見解を中心に」のタイトルで、イスラームの観点から話された。森山氏はまず『クルアーン』におけるヨセフを紹介され、彼がムハンマドに先立つ預言者の一人とされ、人気があること、また、『クルアーン』で唯一、1つの物語としてまとまった章であり、「最も美しい物語」と呼ばれる「ユースフ章」で語られること、そしてその内容は、ヘブライ語聖書の創世記37-50章とほぼ同一であることを紹介された。また、『クルアーン』解釈者であり、伝承・歴史学者、法学者のタバリー（Muhammad Ibn Jahir al-Tabari）による、有名なポティファルの妻によるヨセフへの誘惑に関するイスラームの伝統における注釈と伝承が紹介され（イスラームにおいて、ヨセフが誘惑を斥け得たことは神の恩寵とされる）、ヨセフの無実に関する証人候補としてゆりかごの中の幼児も挙げられていること、また、ヨセフの美貌を目の当たりにした女性達が自分達の手を切ったという記述の意味に関する伝承が伝えられていることが紹介された。いずれも聖書には確認されない伝承である。

ヨセフ物語の受容について研究されている Christian Morimoto Hermansen 氏は、「What can we see/ are we shown in the Kamishibai Version of the Tale of Joseph?（「ヨセフ物語の紙芝居で我々が観るもの、我々に示されるもの）」と題し、近代日本におけるキリスト教受容の一例として、ヨセフ物語を題材にした「紙芝居」（キリスト教視聴覚センター発行、1971年）を紹介された。Hermansen氏は、ヨセフ物語の受容のされ方を検討する際の観点として、創世記のどの箇所が含まれているか、ヨセフはどのように描かれているか、主張や議論の中心は何か、性と権力はどのように扱われているか、ヨセフとその兄弟の関係がどのように描かれているか、どのような倫理的価値が強調されているか、などを挙げられ、それらの観点から、紙芝居におけるヨセフの描かれ方について検討された。結論を要約すると、それは、ヨセフ像に関する聖書の複雑な記述とは異なる、無垢で倫理上高潔な人物としてヨセフを強調するキ

リスト教の伝統に留まるものであり、1970年代の10歳未満の子供たちにキリスト教の価値観を伝えるようなものになっていると述べられた。

David Chandler氏は、「Pop Star Joseph and School Theatre」（「ポップスター・ヨセフと学校上演」）と題して、ミュージカル、「Joseph and the Amazing Technicolor Dreamcoat」（「ヨセフ・アンド・ザ・アメージング・テクニカラー・ドリームコート」、以下「ヨセフ」）について詳しく紹介された。「ヨセフ」は、ヨセフの物語を扱う舞台の中で最も成功を取ったものであるが、Chandler氏はまず、それが古典的な「カンタータ」と現代の「ポップ」ミュージックとを結びつけて成功した「ポップ・カンタータ」の一つであること、そして、「ポップ・カンタータ」の多くが旧約聖書の物語を題材にしながらも、宗教的な目的よりも、楽しみのために作成されたものだったことを紹介された。「ヨセフ」はその中であって80分の長さを持つミュージカルに成長していった点が特異であり、それは「ヨセフ」の物語が複数の要素を持つためであったこと、そして製作者である Andrew L. Webber と Tim Rice の大成功によって、「ヨセフ」は大昔の話であると同時に、1960年代のポップ・ビジネス界のドリーマーと重ねられる様相を、メタ・ナラティブとして帯びて行ったことが説明された。Chandler氏は、「ヨセフ」のメッセージとして、作品中の曲名である「Any Dream Will Do」（「どんな夢でもかまわない」）の重要性を指摘され、大きな夢を見ることの意義を強調された。

これらの講演の後、「関谷先生とその仲間たち」によって、ヨセフに関連する曲目として、「勝利者」と「Amazing Grace」の演奏がなされた。両曲ともヨセフに直接言及するものではないが、ヨセフの物語に重ねられ、そのイメージを拡げるものだった。

全体的に講演の設定時間が短く、講師各氏におかれては意を尽くせない部分もあったかと思われるが、多彩な観点からヨセフを語って頂き、その刺激的な内容に対して、活発な質疑応答がなされた。

（CISMOR 特別研究員 北村徹）



「関谷先生とその仲間たち」  
左から、  
山内直美氏 (Key)、  
関谷直人氏 (Gt.Vo)、  
西原ももこ氏 (Vo)、  
加藤美気流氏 (鍵盤ハーモニカ)、  
中元漢氏 (Ba)



## Urban Religion: Religion and the City in Historical Perspective

主催：同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）

共催：科学研究費補助金 基盤研究 (A) 「イスラエル国ガリラヤ地方の新出土シナゴグ資料に基づく一神教の宗教史再構築」(研究代表者 市川 裕、東京大学、領域番号：17H01640、研究期間 2017-2020)

【日 時】 2019年9月18日(水) 15:00-16:30

【会 場】 同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階会議室

【講 師】 Jörg Rüpke

(エアフルト大学教授/マックス・ヴェーバー高等文化・社会学研究センター  
マックス・ヴェーバー・コレク副所長)

9月18日(水)、同志社大学今出川キャンパス至誠館3階会議室において、本年度3回目となるCISMORセミナー(第20回)、“Urban Religion: Religion and the City in Historical Perspective”が開催された。

セミナーでは、Jörg Rüpke氏により、宗教性と都市性が相互的に形成されてきた“Urban Religion(都市宗教)”をテーマに、「都市への定住の促進とそこにおける宗教活動(urbanising)」および「都市化された宗教(urbanised religion)」という二元的な用語としての宗教の観点から、

「宗教と古代都市」、「現代のグローバル都市における宗教」、「空間的慣習としての宗教」、「宗教と都市化」、「都市化要因としての宗教」、「都市化された宗教」、「宗教的慣習と localization、globalization およびそれらを超越した要素との互換性」、といった内容のご講話がなされた。

此度も多方面の研究者・専門家の方々が参加され、充実した時間となった。ご講演を賜ったJörg Rüpke氏に心より御礼を申し上げる次第である。

(CISMOR 特別研究員 阿部泰士)



Jörg Rüpke 氏

### 訃報

## Samir Nouh 氏が逝去されました



故 Samir Abdel Hamid I. Nouh 氏

当センターの幹事、サミール・ヌーハ先生(Prof. Dr. Samir Abdel Hamid I. Nouh)が2019年4月30日(火)に永眠されました。サミール先生は1946年エジプト生まれ、カイロ大学やイマーム・ムハンマド・ビン・サウード・イスラーム大学などで教鞭を執られた後、2004年から同志社大学神学部客員教授、そして2011年から当センターで幹事を務められました。ご専門は比較言語学や比較文化研究で、数々の著作や講演などを通して、イスラームと日本との間の

相互理解の架け橋として活躍されました。当センターへのサミール先生のご貢献は大きく、カイロ大学東洋研究所との共催による、「宗教的価値国際学術大会(The International Conference on Values in Religions)」の開催には特にご尽力いただいております。サミール先生の当センターへのこれまでのご貢献に感謝するとともに、深く哀悼の意を表します。

(同志社大学一神教学際研究センター)

## 2019 年度前半 活動報告

### 主催イベント

#### 【国内開催】

#### 2019年4月13日(土)、14日(日)

##### ▼国際会議

「古代近東の国際社会における多様な文化」

(“International Cultural Diversity in the Ancient Near East”)

講師(講演会): 下釜 和也(古代オリエント博物館研究員)

藤井 信之(関西大学東西学術研究所非常勤研究員)

発表者(研究会): マリーナ・ゾルマンほか6名(詳細は本文参照)

会場: 同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル、

同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階会議室

共催: 科学研究費補助金 若手研究(B)(研究代表者 山本 孟、同志社大学、領域番号: 7K13549)

協賛: 三島海雲記念財団

#### 2019年5月11日(土)

##### ▼CISMOR ワークショップ

The First CISMOR Young Scholars' Research Group Workshop  
(CISMOR 一神教学際研究会 2019 -1)

In Collaboration with The Graduate School of Theology and  
The Graduate School of Global Studies

発表者: Kyoko Shiga ほか9名(詳細は本文参照)

会場: 同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階会議室

#### 2019年5月18日(土)、19日(日)

##### ▼国際会議

The 10th CISMOR Conference on Jewish Studies  
(第10回ユダヤ学会議)

“The Place of Christianity in Modern Hebrew and Japanese  
Literature: Its Roots and its Contemporary Expressions”

(「現代ヘブライ文学および日本の近代文学におけるキリスト教の  
位置 - その根源と現代的表現 -」)

講師(基調講演): 中村 信博(同志社女子大学学芸学部教授)

発表者(研究会): Doron B. Cohen ほか13名(詳細は本文参照)

会場: 同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル、

同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階会議室

#### 2019年6月3日(月)

##### ▼第18回 CISMOR セミナー

“Are Catastrophes Inherited?: The Case of the Second Generation  
of the Holocaust”

講師: Yigal Schwartz

(ネゲブ・ベングリオン大学ヘブライ文学部教授/ヘクシェリム  
研究所長)

会場: 同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階会議室

#### 2019年6月4日(火)

##### ▼第19回 CISMOR セミナー

“Religious Voices and the Making of Modern Human Rights: 70 Years  
After the UDHR”

講師: Peter Petkoff

(ブルネル大学ロースクール講師)

会場: 同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階会議室

共催: 同志社大学グローバル・スタディーズ研究科

#### 2019年7月6日(土)

##### ▼シンポジウム

「ヨセフの物語について - 宗教、芸術、音楽の観点から」

(“The Story of Joseph: In Religion, Art and Music”)

講師(講演): 勝又 悦子(同志社大学神学部准教授/CISMOR 幹事)

森山 央朗(同志社大学神学部教授)

Christian Morimoto Hermansen(関西学院大学法学部教授)

David Chandler(同志社大学文学部教授)

演者(演奏): 「関谷先生とその仲間たち」

解説(演奏): 関谷 直人(同志社大学神学部教授)

会場: 同志社大学今出川キャンパス 神学館チャペル

#### 2019年9月18日(水)

##### ▼第20回 CISMOR セミナー

“Urban Religion: Religion and the City in Historical Perspective”

講師: Jörg Rüpke

(エアフルト大学教授/マックス・ヴェーバー高等文化・社会学  
研究センター マックス・ヴェーバー・コレク副所長)

会場: 同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階会議室

共催: 科学研究費補助金 基盤研究(A)(研究代表者 市川 裕、東京  
大学、領域番号: 17H01640)

### 共催イベント

#### 【国内開催】

#### 2019年9月20日(金)

##### ▼ワークショップ

第19回アッシリア研究会

発表者: Kazuko Watanabe ほか6名

会場: 同志社大学今出川キャンパス 扶桑館 F105 教室

主催: アッシリア研究会

### お知らせ

CISMOR の出版物である『一神教学際研究 (JISMOR)』  
と『一神教世界 (WMR)』は、電子版の需要に鑑みて、  
かねてより機関リポジトリの導入や当研究センター  
ウェブサイトでの PDF ファイル公開などによる電子版  
への移行を進めてきました。これらの出版物の公開に  
つきましては、電子版のみの発行となります。

### CISMOR 最新情報を発信中です

<http://www.cismor.jp>

CISMOR ウェブサイトより、最新情報を発信しています。  
出版物をはじめ、過去の講演会の動画、ニュースをご覧  
いただけます。

発行	同志社大学一神教学際研究センター (CISMOR)	TEL 075-251-3726	FAX 075-251-3092
	〒602-8580 京都市上京区今出川烏丸通東入	E-mail	rc-issn@mail.doshisha.ac.jp
編集	CISMOR 事務局編集部		